

平成 22 年 度 学 校 評 価 書

学校名	兵庫教育大学附属幼稚園
-----	-------------

1 学校教育目標

心身ともにたくましい子どもの育成 <div style="display: flex; justify-content: space-around; margin-top: 10px;"> ○ 健康な体の子ども ○ よく考えて最後までやりぬく子ども ○ やさしく豊かな心をもつ子ども </div>
--

2 本年度の重点目標

(1) 園運営 (2) 教育研究活動 (3) 他校種との連携	<ul style="list-style-type: none"> ・園運営が主体的かつ円滑にできるよう、園長のリーダーシップのもと、教員一人一人が明確な目的をもって力を合わせて取り組むよう努める。 ・幼児一人一人の特性に応じた適切な指導ができるようにキンダーガーデンカウンセラーのアドバイスも参考に教員間で情報を共有し指導にあたる。 ・園内における「自然とともにある生活」を見直し、幼児の遊びや生活につながる保育の在り方を探る中で、研究テーマ「保育におけるつながりを考えるー自然、体験、仲間ー」に迫る。 ・保護者の保育力を高める「親育てプログラム」を実施し、より効果的な子育て支援事業を推進する。 ・大学との連携では、大学教員を招聘しての研究活動や親子活動、保育活動を計画的に推進し、日々の保育へつなげるよう努める。
--------------------------------------	---

3 自己評価結果（達成状況）【A：達成している B：概ね達成している C：あまり達成していない D：達成していない】

分野・領域	評価項目（取組内容）	取組達成の状況	評価	改善の方策
園運営	○組織運営 ・教員一人一人の主体的な取り組みを促すよう、園長がリーダーシップを発揮し、大学と一体となった園運営を行う。	<ul style="list-style-type: none"> ・園務がスムーズに遂行されているかを教員会議や日々の保育情報交換会の場において点検するとともに、附属学校運営委員会での審議をふまえながら、園長のリーダーシップのもと、大学と一体となった園運営を行った。 ・各教員が、自己目標を定め、常に意識して園運営、学級運営に主体的に取り組めるよう、定期的に管理職が個別の面談や指導助言を行った。 ・保護者による「幼稚園教育アンケート」からも、本園の教育や運営に対して、肯定的な評価が得られていた。 	A	<ul style="list-style-type: none"> ・今後も園長のリーダーシップのもと、教員会議や保育情報交換会、園内研修等を通して、幼稚園全体として保育の質の高まりや、共に学び高め合う教師集団をめざし取り組んでいきたい。
	○学年、学級経営 ・目指す各学年や学級の姿に向け、ねらいを明確にし、計画的な環境構成を行う。	<ul style="list-style-type: none"> ・年度当初に各学年、学級の幼児の実態をふまえ、「学年経営」及び「学級経営」の方向性や課題を明らかにし、今年度の保育の方針をたてた。さらに、学期ごとに振り返りを行い、達成できていることと課題を明確にして、保育を進めてきた。 ・日々の保育については、「週の指導計画」をたて、保育後、反省・評価を行い、次週の指導計画へとつなぐことを積み重ねた。毎週金曜日には、学年ごとに、週の保育を振り返り、次週の保育の方向性を共通理解するため、学年打ち合わせの時間をもった。 ・園行事においては、担当者の計画のもと、各学年・学級でねらいや目指す姿を明確にし、計画的に保育を行い、幼児の育ちにつなげてきた。 	B	<ul style="list-style-type: none"> ・学期ごとの「学年・学級経営」の振り返りは、自己評価が主になっているため、他者評価を含めた反省、評価を通して、教員相互に保育の質を高めていく努力を重ねたい。

4 分野・領域ごとの学校関係者評価

学校自己評価結果及び改善の方策の適切さについての評価 <ul style="list-style-type: none"> ・園運営については、いずれの評価項目においても、自己評価以上のことが実施できている。
<ul style="list-style-type: none"> ・可能であれば、年度当初の各学級の計画に沿って年度末に振り返りを行い、その内容を文書等でまとめると、次年度につながると思う。

分野・領域	評価項目（取組内容）	取組達成の状況	評価	改善の方策	学校自己評価結果及び改善の方策の適切さについての評価
	<p>○説明責任</p> <ul style="list-style-type: none"> 日々の保育については降園時の説明及び「学級、学年通信」等で報告し理解を求め、各行事については、取り組みのねらいを明確に知らせ、あわせて事後のアンケートの結果を参考にその成果及び課題を「ふよっこだより」等で公表する。 	<ul style="list-style-type: none"> 降園時に、各担任から学級の保護者に対し、その日の幼児の遊びの様子をもとに、保育のねらいや幼児の育ちの過程を伝える時間をもった。保護者に幼児を引き渡す際には、個別にその日の様子を伝えた。 「学級・学年通信」を月1回程度発行し、幼児の実態や保育のねらい、担任の思い等を、写真を掲載するなどして分かりやすく伝えてきた。2学期末の振り返りで、「学級・学年通信」の発行回数の少なさが課題として挙げられたが、3学期は、「学級通信」の発行回数を増やすことができた。 「ふよっこだより」を年15回発行し、各行事のねらいや趣旨、実施内容などを伝えた。行事後は、保護者にアンケートを依頼し、行事の成果や課題、改善点等を整理し、再度「ふよっこだより」で伝えた。 保護者による「幼稚園教育アンケート」の結果でも、教育方針を分かりやすく伝え、保護者の願いに答えようとしているとの評価を得た。 	B	<ul style="list-style-type: none"> 「学級・学年通信」については、年間を通して継続的に発行していくよう努めていきたい。 幼稚園ホームページに、保育の様子を掲載するなどし、園保護者のみならず、広く地域にも、幼稚園教育についての説明責任を果たしたい。 	<ul style="list-style-type: none"> 「学年・学級通信」はよく発行しているし、保護者への伝達もできている。ホームページは園に専門に扱う人がいないと難しいし、通信で十分ではないかと考える。
	<p>○危機管理体制の整備及び施設の拡充</p> <ul style="list-style-type: none"> 「附属学校園における安全確保及び安全管理の手引き」に基づき年4～5回の避難訓練を実施するとともに、毎月の施設設備の定期点検とその改善・拡充に取り組む。 	<ul style="list-style-type: none"> 避難訓練は、不審者対応、火災、地震を想定し、年4回実施した。加えて、被災時における引き渡し訓練も1回実施した。不審者対応訓練については、小学校との合同で実施した。 不審者からの避難場所となる各保育室の危険回避のため、各保育室にロールカーテンを設置した。 不審者侵入時の対応について、県警より講師を招聘し、全教員で訓練を受けた。また、防刃盾導入時にも三附属合同で、県警より講師を招聘し扱い方等に対する訓練を受けた。 業者による大型遊具の点検を行い、さらに毎月の安全点検を点検項目にそって実施し、その結果に基づく施設整備の改善を速やかに行うことができた。 怪我や疾病等緊急時の対応リストを再考し、全教員が初期対応を適切にできるようにした。 	A	<ul style="list-style-type: none"> 避難訓練については、年数回の実施に加え、月1回を「安全の日」として位置づけ、各学級で年齢に応じた指導を行っていきたい。 	<ul style="list-style-type: none"> 避難訓練については、前年度からの改善がなされている。
教育研究活動	<p>○教育活動</p> <ul style="list-style-type: none"> 幼児一人一人の特性に応じた指導ができるよう教員同士及びカウンセラーによるアドバイス等を日々の保育情報交換会や教員会議等で共有する。 	<ul style="list-style-type: none"> 学年・学級の経営案や各学級の週の指導計画等を全教員に配付し、全学級の保育の経過や各担任の保育の意図を共有するとともに、学年・学級の枠を越えて教員間で連携し、幼児支援や指導を行えるよう協力体制をとった。学年・学級の経営については、学期ごとに振り返りを行い、課題を明らかにし、保育に活かすように取り組んだ。 必要に応じて個別の指導計画を作成し、学期末に振り返りを行うなど、指導の充実を図った。 毎日の保育終了後に、保育情報交換会を行い、一日の保育や幼児の様子、育ち、課題等を話し合った。 キンダーガーデンカウンセラーには、週1回定期的に来園してもらい、指導方法のアドバイスを受けたり、保護者の相談へとつないだりすることで、より適切な指導を行うとともに、全教員との話し合いを学期に1回もち、共通理解を深めた。 就学に向けて、小学校・幼稚園の関係者と保護者とが話し合う場を、必要に応じて設定した。また、日常の幼児の様子を附属小学校から見に来てもらう機会を設けた。 	B	<ul style="list-style-type: none"> 指導上困難なことなど自由に意見を出し合っていけるような雰囲気作りをさらに進め、教員間の意思の疎通や共通理解をよりいっそう図っていきたい。 就学に際し、保護者が適切な判断ができるよう、情報の提供や話し合いの場の設定をより丁寧に行っていきたい。 	<ul style="list-style-type: none"> 教育研究活動についての自己評価結果は妥当であり、改善の方策も適切である。 カウンセラーがいることは、恵まれた環境であると考えられる。改善の方策に示されている内容を進めていってほしい。

分野・領域	評価項目（取組内容）	取組達成の状況	評価	改善の方策	学校自己評価結果及び改善の方策の適切さについての評価
	<p>○研究活動</p> <ul style="list-style-type: none"> 園内における「自然とともにある生活」を見直し、幼児の遊びや生活につながる保育の在り方を探る。 	<ul style="list-style-type: none"> 研究テーマ「保育におけるつながりを考えるー自然、体験、仲間ー」に沿って、園内研修会を月2回行った。日々の幼児の姿や遊びの様子からエピソードを記述することや、昨年度に引き続き週の指導計画に研究テーマに関する保育の課題をあげるなどの方法を通して、研究を進めた。研究成果を十分にまとめるまでには至らなかったが、幼児の育ちの捉えや保育の見直しに役立てていった。 年6回、教員が互いの保育を見合う機会を設け、一緒に考えることで保育の向上につなげてきた。後半では、大学教員だけでなく、附属小中学校にも案内し参加してもらうことで、有意義な教員間の連携の一つとなった。 	B	<ul style="list-style-type: none"> 研究成果をまとめ、教育実践につなげていけるようにしたい、 保育を見合う会やその事後研修については、今後も附属小学校等関係機関への案内を行い、様々な視野から保育や幼児を捉え、学びを深めていけるような機会にしていきたい。 	<ul style="list-style-type: none"> 研究発表会での研究成果の発表が十分でなかったため、さらに研究活動に力を注いでもらいたい。
	<p>○子育て支援事業の充実</p> <ul style="list-style-type: none"> 保護者の保育力を高める「親育てプログラム」を実施し、より効果的な子育て支援事業を推進する。 	<ul style="list-style-type: none"> 「親育てプログラム」として、「子育てひろば」へのスタッフとしての参加、「誕生会」「親子活動」「弁当参加」「ここにこ子育て講座」とそれらの活動を通じた保育参加・保育参観を実施した。 スタッフとして参加の保護者には、事前の打ち合わせ、事後の反省会を設け、子どもの成長に気付いたり、かわり方を確認しあったりする場とした。また、参加していない保護者にも活動の様子が分かるよう「だあいすき」を発行し、情報を提供した。 「誕生会」「弁当参加」では、園長・副園長を交えた懇話会や担任と話す場を設け、子育てを考える機会となるようにした。 	B	<ul style="list-style-type: none"> 「子育てひろば」へのスタッフとしての参加は、クラス単位での活動で無い場合には、参加者が少なく固定化する傾向があるので、より積極的に参加を促していきたい。 	<ul style="list-style-type: none"> 園長・副園長や教員と話す場があることで、十分に子育て支援につながっている。
地域への貢献	<p>○開かれた幼稚園づくり</p> <ul style="list-style-type: none"> 地域の未就園児親子参加の「子育てひろば」を年12回実施し、地域、幼稚園、家庭がともに育つ活動を展開する。 	<ul style="list-style-type: none"> 未就園児親子参加の「子育てひろば」を、年12回実施した。年間の参加登録者数は120組であった。一日の前半は、「うれしのタイム（在園児や「きっすくらぶ」の保護者が遊んでいる場）に参加、後半は園長の「子育てワンポイント講座」と副園長による「ふれあい遊び」の日と、各クラス単位で在園児や保護者と共に活動する日を設けた。 「子育てひろば」の内容をホームページに載せたり、加東市社会福祉協議会に「子育てひろば」や地域の未就園児が参加できる行事を知らせたりした。 	A	<ul style="list-style-type: none"> ホームページを工夫するなど、地域に向けてより丁寧な情報の発信をしていきたい。 	<ul style="list-style-type: none"> 地域への貢献についての自己評価結果は妥当であり、改善の方策も適切である。 近隣の未就園児が参加する場があり、開かれた幼稚園になっている。「子育てひろば」参加の保護者からの口伝えで、その情報は十分に伝わっているのではないかと考える。
	<p>○研究発表や公開保育</p> <ul style="list-style-type: none"> 年3回の幼年教育研究会を通して、研究の成果を発表し、地域及び社会に貢献する。 	<ul style="list-style-type: none"> 第1回幼年教育研究会(5/26)は、県内外の公私立幼稚園保育所、大学教員、大学院生等、44名の参加者を迎え、公開保育、幼年教育研究会総会、研究協議、分科会を行った。第2回幼年教育研究会(11/3)は、83名の参加者を迎え、公開保育、研究経過報告、事例発表、大学教員による講演会を行った。第3回幼年教育研究会(1/26)は、59名の参加者を迎え、講師による講演、分科会を行った。 	A	<ul style="list-style-type: none"> 昨年度に引き続き、第2回幼年教育研究会を祝日に実施したところ、多数の参加があったので、次年度以降も、年1回は土曜または祝日の開催とし、地域及び社会に貢献していく機会としたい。 第3回幼年教育研究会では、「今後の幼保一体化のゆくえ」についての講演を組み込み、最新の動向についての理解を深められたので、今後も、研究テーマに限らず、大学の附属であるよさを活かした講演を随時いれていけるとよいのではと考える。 	<ul style="list-style-type: none"> 休日の開催は、参加者にとっても附属幼稚園にとっても効果があるのではないかとと思われる。 公開保育を実施するのなら、附属幼稚園が重点的に大切にしている部分（例えば、研究テーマにつながる部分）が、参加者にわかるような保育を強調・工夫していくべきだと考える。

分野・領域	評価項目（取組内容）	取組達成の状況	評価	改善の方策	学校自己評価結果及び改善の方策の適切さについての評価
他校種（小、中、高校、大学）との連携	<p>○校種間連携</p> <ul style="list-style-type: none"> 近隣の高校も含めた他校種との交流は、ねらいを再認識し、活動を見直す中で互恵性のある連携活動を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> 附属小学校との交流として、1年生が国語科の一環として「くじらぐも」の読み聞かせを幼稚園で行った。さらに、1年生の生活科の一環として5歳児との給食交流も行った。事前に打ち合わせを行い、双方にとって意義のある活動とすることができた。また、5年生と5歳児の給食交流も行った。それ以外にも、7月に行った「わくわくキャンプ」に附属小学校教員にも参加してもらい、夕食やキャンプファイヤーを通して、幼児との親しみを深める機会にできた。 附属小学校研究発表会に参加し、授業を参観したり、講演を聴いたりした。また、附属小学校教員に保育の参観や園内研修会への参加をしてもらい、お互いの意見交換を行った。幼稚園からだけでなく附属小学校からの積極的な働きかけもあり、幼児児童の交流や教員間の交流・連携ができていた 附属中学校の技術・家庭科として、3年生と4、5歳児がペアを組み、交流活動を年2回実施した。1回目は一緒に好きな遊びをし、2回目はおもちゃを作って遊んだ。互いのねらいを明確にして活動することで、互恵性のある連携活動とすることができた。 兵庫県立社高校1年生が「ふれあい育児体験」として全園児と一緒に遊んだり弁当を食べたりした。また、体育科による「行進」を全園児で見る機会を設け、その後一緒に遊ぶことで交流を行った。 	B	<ul style="list-style-type: none"> 互恵性のある連携・交流を今後も続けていきたい。そのためにも、日常の小学校の授業、特に低学年の授業を幼稚園教員が参観する機会を増やしていきたい。 社高校生との交流は、より意義あるものとしていくために、担当者同士の事前の打ち合わせの時に、もう少し細かい打ち合わせを行っていきたい。 	<ul style="list-style-type: none"> 他校種との連携についての自己評価結果は妥当であり、改善の方策も適切である。 よく取り組んでいる。小学校との連携は重要な課題であるので、年度末に次年度の取組を計画に入れるなどして、双方共に共通認識していく必要がある。
	<p>○実地教育(教育実習)</p> <ul style="list-style-type: none"> 新教育課程としての実地教育Ⅲが効果的な実習となるよう努める。 	<ul style="list-style-type: none"> カリキュラムの変更に伴い実地教育Ⅴが廃止されたことをうけ、実地教育Ⅲのオリエンテーションを4月と実習が始まる直前の2回行うとともに、実習が始まるまでに、実習生が少しでも園や子どものかかわりをもち課題意識を明確にもって実習に望めるように、園に来て保育に触れる場を提供するなどサポートした。 2年目になる学校サポート体験学習では、各行事ごとにオリエンテーションを行い、実習生が役割に責任をもって取り組めるように配慮した。また、各自が課題意識をもって取り組めるようにし、課題に沿った記録を提出したり、担当教員と話し合う機会をもったりするなど、効果的に実習ができるようにした。 	A	<ul style="list-style-type: none"> 実地教育Ⅲでは、事前に大学で学んでおくべきこと、指導講話の中で共通に理解させたいことなどを大学教員と吟味し、より効果的な実習ができるようにしたい。 実地教育Ⅲの前後にも継続して現場での学習ができるように、「学校サポート体験学習」の機会の活用などを年度当初のオリエンテーションなどで伝えていきたい。 	<ul style="list-style-type: none"> オリエンテーションの充実を図るなど、実地教育Ⅲが効果的な実習になるよう努められている。
	<p>○大学との連携</p> <ul style="list-style-type: none"> 大学教員を招聘しての年2回の親子活動や年4～6回の保育活動を推進したり、園内研修会に参加、助言を求めたりするなど大学との連携を密にした取り組みを行う。 	<ul style="list-style-type: none"> 3、4歳児の親子活動（各年1回）、4、5歳児の陶芸活動（各年2回）を専門の大学教員の指導のもと実施した。親子活動では、それぞれの年齢に合った遊びを大学教員の指導のもと、親子で存分に楽しむことができた。陶芸活動は、昨年度同様大学キャンパスで行うことができ、陶芸や彫刻、絵画などの作品や様々な器具などの本物に触れる魅力を味わうことができた。また、大学構内の秋の自然も存分に楽しむことができた。 30周年記念式典に向けて5歳児が考えたお祝いの歌の歌詞への曲や伴奏の作成に、専門大学教員による協力を得た。また、幼児への歌唱指導やピアノ伴奏、指揮法についての指導も受けることができた。 PTAとの共催で年4回実施した「にこにこ子育て講座」で、大学教員による生演奏を聴く機会を得たり、講義を聴くことができたりした。 大学幼年教育コースの教員には、幼年教育研究会の講師やコーディネーター、指導助言者として参加の他、園内研修会に参加を依頼し、指導助言を受け、保育の資質向上に役立てていった。 	B	<ul style="list-style-type: none"> 協力教員と園とのスケジュールが合わせにくいこともあったので、連携が効果的に行えるように、できる範囲で早めに連絡を取り合っていきたい。 	<ul style="list-style-type: none"> 大学とはよく連携できている。大学教員の園内研修会への参加については、事前におおよその時期を伝えておくと、計画に沿ってより適切な指導助言が受けられるのではないかとと思われる。